ルート2027 恋愛ルート

アズマケイ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルート２０２７（本宮ジュンに憑依）恋愛ルート。それぞれ独立したルートでありオムニバス方式。なお本編に関係はありません。

目次

ヤマト編 1
ヤマト編2 8
太一編 15
太一編2 23
太一編3 29
太一編4 36
一乗寺治編 45

ヤマト編

それは夏休みのことだった。
「ただいまぁ！」
「あら、おかえり、大輔」
「なあなあ、姉ちゃんは!?」
「ジュン？ジュンなら部屋にいるんじゃない？」
「わかった、ありがと！」

脱ぎっぱなしの靴を放り出した大輔は、ランドセルを自分の部屋に放り込むやいなや、ばたん、と乱暴にドアをしめる。そして、どんどんどん、と真向かいにあるジュンの部屋のドアを叩き始めた。おーい、姉ちゃん、ちょっと！ってジュンを呼ぶ大輔だったが、ジュンの部屋からは返事がない。騒がしい大輔を見かねて、おやつの準備を始めたお母さんが、こーら、とリビングから声をかける。

「大輔、うるさい。静かにしなさい」
「だって姉ちゃんが。なあ、どっか遊びに行った？」
「そんなわけないでしょ、今日も一日うちにいたわよ」
「えー、じゃあなんで返事しないんだよー」
「またパソコンしてるんじゃない？」
「えー、また？」
「百恵ちゃんに頼まれたみたいだしねえ。まあ、いいわ。入っちゃいなさい、大輔。どうせ鍵かけてないわよ」

がちゃ、ってドアノブを回すと、あっさり空いてしまった。思わずお母さんを見た大輔に、ほらね？ってお母さんは笑った。おやつだから、ついでに呼んできて、って言われた大輔は、はあい、って返してドアを開けた。ねえちゃーん、って呼びかけてみるが、パソコンの前にいるジュンは全然気づいていないようだ。
相変わらず、女の子の部屋とは思えない空間が広がっている。まる

で物置みたいだった。小学校の頃から使っている勉強机、洋服タンス、カーペット、たくさんの本がおいてあるラック、は隅の方に追いやられている。ジュンがいるのは、部活で使うという名目で集められたパソコンや電子機器が並んでいるところだ。

これがほとんどのスペースをとっているため、まるで物置のようになっているのだ。ノートパソコンにコードを繋ぎ、なにかの機械とつないである机の前に、ジュンは座っていた。ヘッドホンをあて、音漏れしない程度の音量で作業用ＢＧＭを流しながら作業をしているジュンである。

音楽を聴きながらの方が作業がはかどるため、ジュンは集中したいことがあると、どこかの動画か無料素材サイトで拾ってきた音楽を流しているのだ。近づいてみると、いくつものウィンドウを並べて、難しい顔をしてキーボードを打ち込んでいた。キーボードには目もくれない。ブラインドタッチである。

相変わらずなにをしているのか、よくわからない。でも、こういう時のジュンが一番生き生きしていることを大輔は知っていた。基本的に、こういう時のジュンは、何があっても反応がない。それだけ自分の世界に入り浸っているのである。

「ねえちゃん、ねえちゃん」

とんとん肩を叩くと、ヘッドホンを当てたままのジュンがこちらを向く。ああ、おかえり、と口パクが笑う。おやつは？って聞くと、口の形で判別したのか、あとで、って言いながら作業に戻ってしまった。とんとん肩を叩くと、なに？ってまたこっちを見る。ちょっと話が、っていうのに、あとで、って言いながら目はディスプレイに泳いでいる。

どうやら作業に集中したいようだ。ヘッドホンを外そうと手を伸ばすと、こーらって笑いながら耳元を防衛されてしまい、埒があかない。お母さんにいっといて、ってヘッドホンをしているせいか、随分と大声な返事をされてしまい、作業に戻ってしまった。

「あーもう、なんだよ。ちゃんとチビモン置いてきたのに」

大輔はためいきである。３年前、太一たちと知り合ったことで、ジュンはデジモンを知っている。だから大輔がチビモンを連れて帰ってきた時、それを隠すのは京や伊織より楽だった。あー、今度はアンタが選ばれし子供なんだ？まあがんばんなさいよ、って肩を叩かれながら笑われただけだ。お風呂に入れたり、夕御飯や朝ごはんを準備したり、それとなくフォローしてくれるのは感謝している。

何があったのか基本的に聞かないスタンスである。どうせアンタはなんにも言わなくてもやってくれるでしょ、ってよくわからない信頼のもと、好き勝手させてくれる居心地の良さは今なお健在だ。そんなジュンからの注意はたったひとつ、ぜえったいにアンタのデジモンをアタシの部屋に入れないでよねってことだけである。デジモンが近くにいるとパソコンが壊れる。

近くにある付属機が壊れる。パソコン部や演劇部で必要なものがブッ壊れたらえらいことになる。光子郎のパソコンのように、デジモンの発する電波に対応していないのだ、と言われた。うそつけ、うそを。３年前からそれをしってるジュンがなんの対処もしないわけがない。現に東京は世界有数の電波障害対策都市になったのだ。

ついでにそういう商品もバカ売れしてはや３年である。結局、チビモン禁止令の理由は謎のままだ。だいしけのねえちゃん、おれのこときらいなのか？って不安そうな顔をするチビモンに、そんなこといってないでしょ、ってほっぺたをフニフニしながら笑ったからデジモン嫌いはない。Ｄ３を興味津々で取り上げられてしまったのを見ると、尚更。

光子郎とアメリカのハーバード中学生の研究結果をメールでやり取りしている位には、興味津々だった。いまいちわからない大輔である。まあ、そんなことはどうでもいい。今大事なのはジュンと会話することだ。１２年間同じ屋根の下で暮らしてきた大輔は、こういう時の対処法をよく知っている。

大輔はヘッドホンについている音量メモリをスライドさせた。ジュンの体がびくっと震えて、女の子とは遠い悲鳴があがる。ミュートにするつもりだったのに、最大音量にしたのだ。大輔は、ミュートに戻す。たまらずヘッドホンを外したジュンは、耳鳴りがするのか、頭痛がするのか、涙目で耳元を抑えている。声にならない悲鳴を上げてうずくまっているジュンは、なにすんのよおって震えていた。

「姉ちゃんが悪いんだろー」
「だからってこれはないでしょ、アンタねえ。あーもう、耳痛い」
「主電源落とすよりマシだろー」
「やめて、マジでやめて、ブルースクリーンはいやあっ！」
「元気そうじゃん」
「もうなれたわよ、誰かさんのせいでー」
「姉ちゃんが悪いんだろ」
「わかったわよ、もー。なに？」

はあ、ってためいきをついたジュンは、ようやく耳鳴りが収まったのか大輔を見上げる。

「今日さ、ヤマトさんが来てくれたんだ」
「珍しいわね、アンタがそっちの話すんの」
「まあなー」
「へー、よかったじゃない。まあ、最近ようやく落ちついた感じ？え、なに？それだけ？」
「・・・・・やっぱ違うよな」
「なにがよ？ちょっと話が見えないんだけど、大輔？」

うーん、じゃあなんで、ってひとりごとをつぶやきながら考え込み始めてしまった大輔に、ジュンは疑問符を飛ばす。だいすけー？って言われて我に返った大輔は、ちょっと待っててくれよって言いながら

部屋を出ていく。そして、何かを持って帰ってきた。

「これ」

差し出されたのは、コンサートのチケットだ。

「京ちゃんから渡されたの？百恵から？」

受け取ったジュンは、あー、って苦笑いした。ヤマトの所属するバンドのチケットだったのだ。

「見にこいって誘われたの？たいへんねえ。せっかくだから光ちゃんといってみたら？」

「ちがうよ」

「え？なにがよ？チケット余ったから配ってんじゃないの？」

「違うって。ヤマトさんから預かったのは、これだけだって」

「じゃあなんでその一枚をアタシに渡すわけ？」

「ヤマトさんに頼まれたんだよ」

「・・・・・ちょっと待ってよ。この日は演劇部の合宿があるから無理だって、断れって言ったじゃない」

「ヤマトさんと千恵さん、同じクラスなんだよ！百恵さんから、そんなのないって筒抜けだっての！」

「百恵の裏切り者ーっ！」

「え、なに、ヤマトさんとねえちゃん、付き合ってんの？それともヤマトさんの片思い？別れ話になってるとか？いくら誘ってもこないからって頼まれたんだけど」

「ちょっと待ちなさい、大輔。いくらなんでも、話が飛びすぎよ。アタシとヤマトくんが？そんなわけないでしょ」

「うそつけー。じゃあなんで、あのヤマトさんが、絶対だぞって念押すんだよ、わざわざ俺だけ呼び止めて、みんながいなくなったあとで、こっそり渡すんだよ。ぜったい何かあるだろ、ふつう！」

「だから違うって言ってんでしょうが。落ち着けっつーの」
「じゃあ、なんでヤマトさんが姉ちゃんにチケット贈るんだよ」
「あーもう、だからやだったのに！」

はあ、っとジュンは盛大にため息をついた。
ヤマトのバンドがバンドの方向性を知ってもらうため、サンプル音源を収録したデモテープもどきをつくることになったのが始まりだ。パソコンを扱える人間がいないなら、カセットテープでいいはずだ。でもやっぱりカッコ悪いからＣＤやＭＤを使いたいらしい。
不幸にもお台場中学校にはパソコン部があり、１年生ながら部長を任された光子郎がいる。パソコンが使える人間がいないか、と頼まれたヤマトは、真っ先に光子郎や京が思い浮かんだが、無理である。そこに目をつけたのが、ヤマトとお近づきになりたい、ミーハー気質の井ノ上家次女である。たまたま同じクラスだった彼女は、こっそり百恵おねえちゃんに相談する。
ヤマトのバンドもチェックしていたアイドル愛好家のお姉ちゃんが食いつかないわけがない。ぐるりと回って、知り合いのバンドが困ってる、という触れ込みで連れてこられたジュンは、ヤマトと鉢合わせしたというわけだ。ここでヤマトと知り合いだとばれてしまったジュンは、井ノ上姉妹からヤマトのバンドに連れてけと圧力をかけられることになる。
一応、頼まれたし、知り合いのよしみで、って引き受けたジュンだったが、うっかりヤマトのバンドメンバーに、デモテープの技術を気に入られてしまったのである。今後とも宜しく、っていわれてしまい、忙しいからと逃げ回っているというわけである。めんどくさいことは相変わらず嫌いなジュンである。

「姉ちゃん、夏フェスとか好きじゃん。ヤマトさんのバンドも手伝えば？」
「やーよ、興味ないもん。Ｒ＆ａｍｐ；Ｂとか古すぎ」
「あーるあんどびー？」

「リズム・アンド・ブルースの略よ。ローリング・ストーンズとかアニマルズとか５０年代にアメリカで流行ったジャンルでね、ヤマトくんのやってるバンド、ほんとはそっち方面行きたいんだって。今の子達わかんないでしょ、絶対」
「なんで姉ちゃんしってんの？」
「ハマってるわけじゃないわよ。こういうことするときは、洋楽を聞くって決めてるの。邦楽だと歌詞が気になっちゃって作業になんないでしょ。だから何言ってるのかわかんない洋楽の方がＢＧＭに向いてるってわけ。気に入った曲は知りたくなるでしょ？」
「あー」
「まあ、万太郎さんが貸してくれた漫画の影響もあるんだけど」
「あれ、こわくねー？」
「慣れたら結構面白いわよ、あれ」
「ふーん。でもさ、それ知ってるからやってほしいんじゃ？」
「やっぱそうよねー」

あーもう、どうしよう、と疲れたようにジュンはいう。大輔はどこかほっとしたように、笑った。

ヤマト編2

「なあ、ちょっといいか？」
「あ、は、はい！なんでしょう、石田君」
「なんでそんな硬いんだよ」
「だって石田君がアタシに話しかけるなんて珍しいと思って」
「なんだそれ」
「アタシのところにパートナーが来るまで、ちゃんと話したことない気がするんだ」
「……そういえばそうだな」
「でしょ？で、そんな石田君がアタシに何の用？京にもお姉ちゃんにも話せないことなんだろうなー、とはお察しするけど」
「まあ、そうだな」
「で、なになに？協力するかは報酬によるわよ」
「知ってた。これでどうだ」
「さっすが、石田君！毎度あり！」
うふふ、と怪しく眼鏡が光る。ヤマトから渡されたバンドのチケットを数える姿は商売人のごとく。井之上家の次女は要領よく生きている。ちょっとした臨時収入のためならヤマトたちのバンド活動のリークもするし、太一たち選ばれし子供たちの中学生活を実況だってする。
お姉ちゃんとお姉ちゃんのお友達のお願いを聞くことでちゃっかりおいしいポジションをゲットし続けてきた彼女は、基本的にもっとおいしい報酬を提示すればそっちに流れていく。まるでマスメディアのごとき流動性ながら、ぎりぎりのラインを保っていられるのは、基本的に傍観者的立場であり続けているからだろう。面白ければそれでいいのだ、この子は。
「で、なーに？」
「ひとつ聞きたいんだけど、ジュンさんと井之上のお兄さんて付き合ってるのか？」
「え、そんなことを聞きたかったの？じゃあチケット返すよ、見合わな

いもん。付き合ってないよ」
「え、そうなのか？」
「付き合ってるわけないじゃん。お兄ちゃんはただいま3度目の破局を迎えたばっかりで、絶賛女不審に陥ってるところだもん。可哀想だからお姉ちゃんとジュンさんで一緒に遊びに行ってるみたいだけど、ホントなら彼女さんといくはずだったところに行ってるだけだしね」
「いや、でも、最近井之上のお兄さん、よくジュンさんと話してるだろ？」
「そりゃ、お兄ちゃんがＯＢだからに決まってるじゃない。ジュンさん、よくお兄ちゃんにアドバイスもらってるもの。まあ、師匠みたいなもんだし、お兄ちゃん。卒業作品の最終調整だからって、ジュンさん夜遅くまで残ってるの石田君も知ってるでしょ？ＰＶのプロモ、忙しいからって断られたんだから」
「まあな。そうか、付き合ってないのか。ありがとう、井之上。助かった。これ、お礼に渡しとく」
「え？いいの？じゃ、遠慮なくもらうね」
「他のやつにはいうなよ」
「はいはーい、わかってるって」
「ほんとかよ」
「ちゃんともらえるものもらえたら何も言わないわよ、アタシはね」
「ほら」
「りょーかい、火消しはまかしといて」
　にっこり笑った井之上家の次女に、ヤマトはため息をついたのだった。井之上家で一番苦手なのは間違いなく彼女である。でも、今回ばかりは仕方なかったのだ。京は間違いなく根掘り葉掘り聞いてくるし、口にチャックがついていない京ではお台場小学校組に筒抜けになるだろう。
　そうすれば瞬く間に噂は広がってしまう。お姉さんはいわずもがな。お姉さんはヤマトのバンドのファンなのだ、めんどくさくなることは間違いなかった。ただでさえジュンはヤマトのバンドの活動の裏方として助っ人をしてくれている貴重な人材なのである、トラブル

になればもともと乗り気ではなかった助力がますます遠のいてしまうだろう。

もともとジュンとヤマトの接点はなにもかもが間接に間接をはさんだものなのだ。そんなヤマトが選ばれし子供とデジモンという関係以外で、初めてできたジュンとの直接的な繋がりをこんなところでなくしたくは無かったのである。

きっかけははっきりしている。ヤマトとジュンの交流は、中学生になるまでは、お世辞にもほかの選ばれし子供たちと比べて飛びぬけて大きいものではなかった。ゲンナイさんと一緒に選ばれし子供たちの冒険や戦いをバックアップしてくれた、心強い味方であることは事実だし、頼りにしていた。

大人だから遠い所に行く時、保護者役として同行してくれた。ふりかえれば必ずいる、待っていてくれる存在であることはわかっていた。でも、それは他の選ばれし子供たちにとっても同じだったし、ヤマトにとってもそれだけだった。大きく関係が変化したのは、やはり大輔が選ばれし子供に選ばれたことだろうか。

最愛の弟が選ばれし子供になったとわかった時、いままでバックアップに徹していた ジュンは、本格的に選ばれし子供たちの活動に関わるようになった。今までは見守る立場だったが、明らかに守る立場に変化した。あたりまえだ、大輔は家族なのだから。

しかも京も伊織もジュンにとっては、まえの選ばれし子供たちと違って家族ぐるみの付き合いをしている妹や弟みたいな存在だった。より身近な存在だった。それは関わり方が変わってくるのも当たり前である。そのあたりまえがヤマトにとっては、あまりにも新鮮にみえただけ。

ジュンが家族や仲がいい友達に向けるなにもかもが、ヤマトのしっているジュンと違っていたから、驚いただけだ。そのなかにヤマトが入っていない、というあたりまえの現実が受け入れられなくて、なんだかいやだった、それだけである。気付いたら、ジュンを目で追っていた。今までのなにもかもが間接的な関係では物足りなくなった。つまりはそういうことだ。

未だにヤマトはその感情に名前が付けられないでいた。ジュンに可愛がられている大輔たちが羨ましいのか。その優しい眼差しのさきにヤマトがいたいのか。それともジュンの特別になってそのすべてを独占したいのか。タケルを中心に世界が回っていたヤマトが、じぶんだけの世界を回し始めてからまだ3年しかたっていないのだ。

生まれて初めての感情である。とまどいしか生まれない。バンドだって、お父さんがやっていた、という話をきいてはじめたのだ。生まれて初めてヤマトがやりたいといった。じぶんだけの、を捜し始めた。思いのほか周りが盛り上がって、ヤマトもヤマトなりに楽しんでいるからやってるけど、まだまだいろんなことをやって、捜していくつもりだ。

タケルのお兄ちゃんではない、ヤマトというものを見つけるために。その先でジュンとつながりができて、今まで知らなかったジュンを知って、ヤマトも知ってほしいと思っているだけかもしれない。みんなに認められるということに過敏な少年は、わりと自己顕示欲が強い。ジュンがヤマトのバンド活動に協力してくれていることがうれしいけど、あんまり興味がなさげなのが嫌なのかもしれなかった。

とりあえず、ジュンに彼氏がいないと知ってほっとするくらいには、ヤマトは　ジュンのことを意識している。ポケットから出した携帯を操作して、メールを送る。今日はバンドで遅くなる。明日の朝食と弁当は期待しないように。食器はシンクにおいとくこと。まじかよという泣き顔のメールが届いたのは、すっかり暗くなってからだ。

「ヤマト君じゃない、どうしたの？いま帰り？」

「本番近いから練習してたら遅くなって。ジュンさんは？」

「あー、アタシ？ようやく卒業作品にメドがついたからね！もう遅いって追い出されちゃってねー、家に帰ったらまた頑張るわ」

「いつごろ終わりそうなんだ？」

「春休みを生贄に捧げればすぐできるわ、たぶん」

「ジュンさん、大学行くんだよな？準備は？」

「い、痛いとこついてくるわね、ヤマト君。そうねー……あはは。正直、あと少しで終わりそうなの。これが出来たらゲンナイさんのとこ

ろに持って行って、デジバイスのプログラムにアップデートしてもらおうかと思ってるわ」
「卒業制作までそんなプログラム組んでたのか……」
「まあ、今までの集大成だしね。大学行ったら、デジタルワールドの援助なしで組み上げてやるわよ、新しいアプリ。楽しみにしててね。将来はそっちに進むのが夢なの、アタシ」
「ユメ、か」
「ヤマト君はどうなの？新しい曲進んでる？」
「ジュンさんが加わってくれたらすぐできるって、前も言っただろ」
「あっはは、まったー。光子郎君みたいな優秀な子がいるじゃないの、お台場中には」
「ジュンさんみたいに、柔軟に対応してくれないんだ。光子郎は音楽方面は無理だから京ちゃんに任せたらテクノポップが出てきたからだめだ。俺のバンドはそういう方向じゃやってないって」
「あー……京ちゃん、今あっちにハマってるからねえ。百恵の影響かなー」
「ジュンさんもああいう方が好きなのか？」
「まえいったと思うけど、アタシは音楽自体に興味はないわよ。作業するのにかかってた方が集中できるってだけでね。百恵の音響に使ったことがあるからやってるだけで。だからさ、アタシよりヤマト君の音楽に興味持ってる子にお願いした方がいいと思うわよ、正直」
「でも、オレはジュンさんだからお願いしたいんだ」
「えー、なんで？まあ、そりゃ、全然知らない子よりはいいでしょうけど、どうなのそれ」
「ジュンさん、４月から大学だろ？」
「まあね」
「忙しくなるだろ」
「たぶんね」
「会えなくなるだろ」
「……えーっと、ヤマト君。それ、言い方間違ってない？まるでヤマト君がアタシに会えなくて寂しいって聞こえるんだけど」

「間違ってない。あってる。だから問題ないよ、ジュンさん」
「……えーっと……え、ほんと？」
「ほんとに決まってるだろ」
「そうよね、ヤマト君はそういうとこ真面目だもんね。冗談でいうわけないわよね。でも、えーっと、あー……ごめん、待ってくれる？全然想定してなかった」
　羞恥で赤らんだ顔を隠すようにジュンはヤマトから視線をはずす。さらりと流されると思っていたヤマトは、思いのほか反応してくれたジュンに驚いてしまう。つられてこっちまで熱を帯び始めるのを自覚する。しばらくの沈黙。あたまのなかがぐるぐるしているのか、言葉がでてこないのか、ジュンはなにもいわないままヤマトと共に帰路を歩いていた。
「想定してないってなんだよ、なにを想定してたんだ」
「え？あー、そりゃ、太一君と空ちゃんについてとか、タケル君と光ちゃんと大輔のこととか」
「好きな人がいるのに、他のやつのこと話せるほど、余裕なんてないっての」
「あ、そ、そっか。そうよね、あはは……」
「驚いたのはこっちだよ」
「え？」
「流されると思ってた。恋せよ、少年って大輔をけしかけるみたいに、からかわれるのかと思ってたんだ。なのに、なんだよ、その反応。期待させるなよ」
「……」
「ジュンさん？」
　ヤマトを見つめる瞳は、ようやく本気であると悟ったらしく、どうしよう、で固まっている。なんて答えればいいんだろうか、と必死で考えているようだ。
「……　えーと、ちょっと待って」
「待てっていったな、また」
「……うん、言ったよ。そうだよ。アタシ、まだ心の準備がだね、」

「ならいつまで待てばいい？」
「え、っ……えっとー、その、うーん……」

三、と指を出される。

「日？」
「短すぎるよ！せめてか月！」
「長すぎるだろ」
「却下!?う、あ、あんまり待たせるのは悪いとは思うけどね、さすがにお互いにやるべきことあるじゃない？主にデーモンとかの行方探しとか」
「保留するつもりかよ、ジュンさん？」
「で、できたら」
「……なら、先にいっとくけど、俺はもう告白したんだ。ジュンさんの返事待ちだよな、今」
「うん、そうだね……」
「最初にいっとく。年下だからって思われたら困るから。俺、自重しないからな」
「……　なんかグイグイ来るね!?」
「なんだ、しらなかったのか？」
「知らなかったよ！ヤマト君、ふっきれるの早すぎない!?」
「遠回しにアピールしたら邪魔が増えるだけだってよくわかったからな。直接会う機会増やす方が早そうだし」
「冷静に分析するのやめてっ……て、ぎゃー！」
「待ってやるけど、なにもしないとは言ってないからな」

ヤマトは笑った。

太一編

『ジュン、メールが届いていますよ。太一からですね』
「え、太一君から？へえ、珍しいこともあるもんねえ」

四苦八苦しながらローマ字打ちを人差し指で押している、微笑ましい小学６年生に思いをはせる。いつもなら、大体このくらいかな、とあたりを付けて本宮家の固定電話か、ジュンの携帯電話のはずだ。相手の時間を拘束しないで、好きな時に見てほしい、という気遣いはまだ小学生にはない。ジュンはドット絵のファスコモンが指差すファイルをクリックした。誤字脱字があるけど、いいたいことはわかるので赤ペン先生はやめておこう。ざっと目を通した、ジュンは、へー、やるじゃない、と感嘆する。

『どうしました？』
「みてよこれ、選ばれし子供たちでチャット始めたんだって」

パスワードとＩＤを入力しないと入れない、会員制のチャットルームの招待状だった。アドレスは太一の家のパソコンなので間違いないだろう、ファスコモン曰くウィルスメールのプログラムではなさそうだから。

『どうしてまた？』
「大晦日で懲りたらしいわよ。みんなと連絡取れないのはやっぱりまずいってことになったみたい。インターネットにつなげば、アクセスできるみたいね。構造はゲンナイさんの隠れ家と同じよ。ほら、デジヴァイスを端子でつないで、個人認証とパスワードとＩＤを入力するタイプのやつ。やってみましょうか」

ジュンは太一のデジヴァイスのプログラムを持っているので例外である。ジュン用にわざわざパスワードやＩＤ、個人認証に使ってい

るデジ文字のプログラムコードを打ち込むページが追加されている。これは光子郎かゲンナイさんの入れ知恵だろう。メールをうつにも四苦八苦するような太一がチャットの管理人なんて出来るわけがない。

見覚えのある名前がカタカナ表記で並んでいた。しかし、確認しにきただけのようで、一言二言コメントしてから出ていく子供たち、デジモン達ばかりである。スクロールしていけば、ジュンが入室したとき、反応してくれたのはタイチだけだった。どうやら待っててくれたようだ。

「お招きありがとね、太一君」

「あ、ジュンさん、来てくれたんだ！待ってたぜ」

この文が帰って来るのに１０分くらいかかった。そのうち、何度か会話をする。ジュンさんうつのはえーなってきて、思わず笑ってしまう。心配しなくても太一が高校生になるころには、ケータイメールをうつ速度はみんな早くなっているだろう。

そのうち、いちいち文字をうつのがめんどくさくなってきたのか、太一は今日の予定を聞いてきた。どうやらチャットに集まった子供たちは予定が合わなくて暇らしい。いいわよーって言葉を最後に、ジュンはチャットルームを後にした。

「あれ、姉ちゃん出掛けるのか？」

パソコンをきってヘッドフォンを外した、ジュンは、廊下で大輔に鉢合わせした。めずらしーという顔をしている大輔をぺしっと叩きつつ、ジュンは笑う。

「いーじゃないの、たまには」

「百恵さんとこ？」

「うーうん、太一君とよ。大輔もくる？なんか暇みたいよ。ゲームで

もする？」
「オレ、これから部活！」
「あ、そっか。太一君が休みなら大輔は部活よね、ごめんごめん忘れてた。いってらっしゃい」
「いーなー、姉ちゃん」
「馬鹿言ってないで、行ってきなさい。レギュラーかかってるんでしょ」
「姉ちゃんも行かなくていいのかよ？」
「そうだった。それじゃーね、大輔」
「おう！」

大輔は階段に向かった、ジュンを見届けて、エレベータに向かった。あー、よかった。ディーターミナルで、ジュンが太一のマンションに向かったと太一に報告しつつ、大輔はエレベータのスイッチを押した。それは一昨日に遡る。

「なあ、大輔」
「なんすか？太一先輩」
「大輔、ジュンさんって、京ちゃんの兄ちゃんと付き合ってるのか？」
「は？え、なんでっすか？え？」
「え、違うのか？」
「え、ちがいますよ？」
「え、でも、フェス見に行ったんだろ？」
「あー、あれですか？あれは京の兄ちゃんが振られちゃって、京の姉ちゃんとうちの姉ちゃんが友達だから一緒に行っただけっすよ。払い戻しできないから、もったいないからって」
「あ、そうなのか」
「うちの姉ちゃん、全然おしゃれしないから、時々京の姉ちゃんに連れてかれるんです。たぶん、着せ替えごっこしたあとじゃないっすか？」
「あ、あー、なるほど。だからいつもと様子が違ったんだ。車から出て

くるからてっきり」
「京の姉ちゃんもいたのに気付かなかったんですね」
「いや、気まずいだろ、なんとなく」
「そうっすか？」
「うん、気まずい」
　いつも意識していない女の子が女の子になっているのを見てしまった感覚である。
「じゃあ、ジュンさんは付き合ってる人いないんだ？」
「いないっすよ、たぶん」
「そっか」
「なんでそんなこと聞くんすか？」
「え、あ、あー、なんとなく」
「なんとなく」

　じとめの大輔である。

「なんだよ」
「姉ちゃん、そういうの興味ないと思います」
「え、まじで？」
「パソコンでなにかしてる時が一番楽しそうなんです。俺のサッカーの試合とってくれるけど、編集してるときが一番楽しそうだし、機械を使ってるときが好きなのかも」
「光子郎みたいだもんな」
「はい」
「ほんと似てないな、お前ら」
「でも、俺の自慢の姉ちゃんです」
「うん、知ってる。なあ、ジュンさんって他に好きな物ってないの？」
「なんでしょう、チャットとか」
「チャットォ？あのパソコンでうつやつ？」
「はい、そうです。海外の人とよくやってます」
「え、ジュンさんって英語できるんだ」

「はい、できます」
「そっか、ますます光子郎っぽいな。チャットかあ。どんなの？」
「パソコン部のひとのあつまりとか」
「へー、そっか。そういうのもあるんだ。光子朗に聞いたらできるかな」
「さあ？」
「そっか、サンキュ、」
「はい」

大輔が知っているのはここまでだ。光子郎がこっそり教えてくれたのは、そのあとのちょっとしたやり取りである。

「太一さんがチャットを考え付くなって思いもよりませんでした」
「それどーいう意味だよ、光子郎」
「叩いて直そうとする人とは思えないです」
「いうようになったな」
「お互い様です」

あはは、と二人は笑った。これでパスワードを入力すればいける。デジタルワールドのデジタルゲートを開く要領をまねさせてもらった。ただのパスワード画面だけだと突破されてしまう。デジヴァイスの認証を追加したのだ。ＵＳＢ端子でつなげばいける。こうして出来上がったのだった。

ぴんぽん、とチャイムが鳴る。はーいという声がして、太一がやってきた。

「おじゃましまーす」
「どーぞ。だれもいねーけど」
「あれ、ホントだ。光ちゃんは？」
「京ちゃんとどっか遊びに行くって朝出掛けた」

「あー、そっか。太一君の家って共働きだっけ」
「そうそう、だから今はだーれもいないんだ。ヤマトたち捕まんなくてさ、この夏休みじゃみんな遊びに行ってて相手がいなくて暇してたんだー」
「あはは、そうなんだ。どーする？ゲームでもする？」
「する！大輔から聞いたけど、ジュンさん、××強いんだろ？やろーぜ！」

こっちこっち、と太一が案内する。スリッパを用意するくらいには成長のあとが見られる太一に感心しつつ、ジュンは子供部屋を急いだ。

「へー、光ちゃんと部屋別れたんだ」
「オレだって一人部屋ほしいって。いいよなー、大輔。小1もう一人部屋だったんだろ？」
「ちゃんと部屋で寝始めたのはもっと上がってからだけどね」
「あはは、なんだよそれー。光はちゃんとベッドで寝てたのに」
「光ちゃん、お兄ちゃん子だもんねえ」

つられて笑った、ジュンと共に、太一は部屋に戻ってきた。さっきのチャット画面がつけっぱなしだ。だめじゃない、と、ジュンは笑って指を指す。太一はあーそれ違うやつとかえす。

「違うやつ？」
「、ジュンさんが来るの待ってたら暇でさ、デジモンってキーワードでヒットしたページを見てたんだ」
「へー、そうなの。見てもいい？」
「いーけど、つまんねーやつらだぜ。デジモンなんか嘘だっていうんだ」
「まあ、見たことないなら仕方ないわよ」
「ディアボロモンの戦い見てたくせに、居ないっていうんだ」

「あ、そうなの？」

ちょっと見せて、と、ジュンはパソコンを見る。カーソルを動かす。こいつ、と太一は指を指す。、ジュンは目を細めた。

「これ書いたの太一君？」
「え、そーだけど？」
「ファスコモン、急いでくれる？」
「かしこまりました、、ジュン。それでは失礼いたします」
「え？」

はあ、と、ジュンはため息をついた。

「太一君、こういうところでは誰が見てるか分からないんだから、じぶんのこととか、友達のこととか、デジモンのこととか、勝手にしゃべっちゃいけないのよ？」

ドット絵のファスコモンが太一のコメントデータを食べてしまった。チャットでは、いきなり消えてしまったコメントに、大騒ぎになっている。

どのみちゲンナイさんが動くとは思うけど、先に対処したことを報告ヨロシク、とファスコモンに言いながら、ジュンは苦笑いした。あー、そういえば、そんなこと先生がいってたような、とつぶやく太一に、ジュンは軽く叩いた。

「太一君はまずネットマナーを学ぶべきよね、光子郎君に教えてもらったら？」
「でも光子郎、うるさいんだよなあ、こういうの」
「いやいやいや、あたりまえだからね、太一くん」
「どーせなら、ジュンさんがいいな」
「もう仕方ないわねえ」

「やった」
「なーに、なんかうれしそうじゃない。言っとくけどあたしはスパルタよ？」
「いいんだよ、ジュンなら」
「なによそれ、へんな太一君」

ジュンは笑った。

太一編2

ぴんぽーん、ってチャイムが鳴った。はーいってモニタを見れば、どこかそわそわしている、落ち着かない様子の太一が立っていた。

太一がジュンの家を訪ねてきたのは、ホワイトデーだからである。3倍返しが基本よね、って空やミミに入れ知恵をして、結構高そうなお菓子を選ばれし子供達に配ったバレンタインデー以来の訪問である。お台場小学校サッカークラブは、上級生と下級生のクラブチームが交互にグラウンドを使っているため、ただいま大輔は部活に出かけたところである。

「いらっしゃーい、太一くん。どうしたの？」

「こんにちは。ほら、今日、ホワイトデーだろ？もってこいって言ったのジュンさんだろー」

「あはは、そうそう、よくわかってんじゃない。せっかくだから上がってく？」

「あ、はい」

ジュンはスリッパを差し出した。はい、これ、って差し出されたのは可愛い包み紙にはいったお菓子である。ホワイトデーだし白いマシュマロが定番でいいんじゃないか、って考えてそうなのに、マシュマロじゃないことにジュンは驚きを隠せない。

大げさなくらい取り乱してやろうかと思ったのに。マシュマロ＝あなたが嫌いです、ネタは定番である。これは光ちゃんに入れ知恵されたかな、ってからかいのネタが減って残念である。それにしてもこれはどう言う意味だろう？とジュンは考える。

光ちゃんがお買いものに付き合ったのなら、あなたは友達のままでいてください、って意味のクッキーあたりを勧めそうなのに。キャンディーが入っているのはどういうことだ。はっはーん、とジュンは思った。

空ちゃんのと間違えたな、この子。不慣れなことするから、とジュ

ンはこっそり笑う。綺麗なリボンが付いてるお菓子の小袋なんて、男の子が持ってるのは気恥ずかしいものがあるのだろう。コートをかけている太一を見ながら、ジュンは飲み物を準備するから先にリビング言ってて、と追い立てる。行ってみると、どこかやっぱり落ち着かない太一が座っていた。

「どうしたのよ、太一くん」
「実は相談があって」
「相談？」
「そうそう、相談！」
「ふうん、そうなんだ。それで？好きな子に誕生日プレゼントでも贈るわけ？」

な、な、なんで!?と顔を真っ赤にした太一に、ジュンは笑った。

「みりゃわかるわよ、顔に書いてあるもの。恋せよ少年ってね」

けらけらと笑うジュンに、バツ悪そうに太一は頭をガシガシと書いた。そっかあ、とがっくり肩を落とした太一は、ほんのちょっぴりすねたような顔をする。太一は、そんなにわかりやすいかよ、とわかりやすいくらい落ち込んでいる。

そりゃあねってジュンは割と容赦なく追い討ちをかけた。がんばれ、太一くん、なんてどこまでも無責任で投げやりな言葉をなげかけた。ここにきてからてんぱりすぎよ、って蹴落とすことも忘れない。

ジュンは心の中でこっそり舌を出す。デジタルワールドの冒険をたっぷり読み込んでいる２０ＸＸ年の人間にとっては、目の前にいる八神太一という少年はとりわけ描写が多い登場人物だったから、今、彼がどういう状況にあるのか手を取るようにわかるのだ。

にやにやしてしまうのは無理もない。サッカー部をやめちゃった空は、華道師範代のお母さんの手ほどきを受けて、日本人女性に華麗

に変身しつつある。今までサッカーボールを蹴っていた男の子みたいな女の子が、どんどん可愛らしい女の子になっていくのだ。

意識しないほうがおかしいだろう。誕生日プレゼントの件で喧嘩するくらい進展したエピソードは、オメガモン誕生の章で詳細に語られているからしっている。そういえばもうすぐそんな季節なんだ、ってジュンは思った。今年中学3年生でよかった。

今日が受験日だったら受かる気がしない。個人的にはあの空がピンどめのプレゼントで怒るなんて想像できない。作者の視点で書かれているため心理描写がないのが困る。太一が女の子として意識しはじめた一方で、空は今までの男のこと女の子の友人関係が変化するのが怖かったのかもしれないし、純粋に気に入らなかったのかもしれない。

あのプレゼントのデザインは結構可愛かったから、女の子にプレゼントすることに不慣れっぽい太一が用意したにしてはセンスがいい。だから光かミミに相談して用意したのがバレてしまい、太一に自分で用意して欲しかった空の怒りを買ったのかもしれない。

当時、小説が出たころ、いろんな憶測がながれたものの、彼らは沈黙を守ってしまい真相は闇の中だった。複雑な乙女心である。女を捨てる生活をしていた前世の延長で、恋人がいない歴＝年齢を更新中のジュンにはさっぱりわからなかった。

「あーあ、ジュンさんにはかなわねーなあ」

ちぇーってうらめしげに見てくる太一に、ジュンはにやにや笑った。もう隠すことも面倒になったのか、太一ははいはい、そーですよ、好きな女の子にプレゼントしたいんだよ、って自暴自棄な暴露を決行した。

どうせ誰だかジュンさんにはわかってるみたいだから、いわないけどさ、ちっくしょー！って面白くなさそうに、ふてくされている。そこまできて、なんで名前を隠すのよ、ってジュンは首をかしげた。そんなの恥ずかしいに決まってるからだろ！って太一は大声を上げた。

こころなし顔が赤い。頬が熱を帯びるのがわかるのか、あーくそ、って舌打ちした。そして太一は、思いっきりおもちゃを見つけた顔をしているジュンを見て、この反応すらおもしろいって思われてることを察して、あーもう、って首を振った。

「わかってんなら、教えてくれよ、ジュンさん。なにがいいかなあ？」
「そんなの自分で考えなさいよ、アタシが手伝ったってバレたら、微妙な空気になるでしょ」
「そりゃそうだけどさあ、ぶっちゃけ思いつかないんだよ」
「それなら、なおさら考えなきゃ」
「えー、なんだよそれ。じゃあさ、ジュンさんは何欲しい？」
「アタシに聞いてどうすんの」
「またそういう意地悪なこという」
「誕生日プレゼントねえ、まあゲームはだめよね」
「そんな高いの買えないっての」
「ま、そうだけどね」

うーむ、とジュンは考える。中学生とはいえ、精神年齢は××歳となっているジュンが欲しいものは、普通の女の子とかけはなれているといってもいいだろう。少女漫画やドラマ、小説、映画の世界である。彼氏？何それ美味しいの？レベルでリア充イベントとはリアルに遠ざかって等しい前世を思い出し、ちょっと死にたくなる気分になりながら、はるかかなたの小学校時代を思い出す。

小学生といっても、高学年になると、だんだん大人びてる子が多かった印象である。女の子は男の子よりも精神的な成長が早いし、大人びた言葉遣いとか仕草をすることが多かった。子供っぽいおもちゃはまず却下。お化粧をしてる子もいた気がするけど、今は１９９９年である。そういった子供向けのお化粧品はまだお高めだし、男の子からのプレゼントで化粧品って斜め上にカッ飛びすぎだ。

「アタシは文房具かなあ」

「え？文房具？」
「そうそう、文房具。もちろん、可愛いお店に売ってるやつね。可愛いスタンプとか、手帳とか、そういうの。学校で流行ってるキャラものだったりするとポイント高いかもね。そういうの集めてる子なら、喜んでくれるんじゃない？まあアタシは集めてないけどね、学校に持っていけないものもらっても困るし」
「文房具かあ」
「あ、でも、アクセサリーの方がいいかもよ。文房具は趣味が合わないといらないしねえ、アクセサリーだったら集めてる子も結構いるし。学校もってっちゃダメってとこ、結構少ないでしょ？」
「そうか？」
「そうそう、どっちも場所取らないし、部屋を散らかさないし、アタシはもらったら結構嬉しいかなあ。おっきなぬいぐるみもらっても、置き場所に困るでしょ？友達と見せ合いっこして楽しめる物なら、なおいいんじゃない？あー、そうだ、手紙書いたらどお？」
「え、手紙？」
「そうそう、手紙。どーせ言いづらいんでしょ？伝えたいことは書いたら？メールとかあるしねえ」
「ジュンさんは意地悪だよな、そういうとこ」
「はあ？何いってるのよ、太一くん。アタシは太一くんの相談に乗ったげてるだけでしょ？好きな女の子にあげるプレゼントを考えてあげてるだけじゃない。しっつれいねえ」
「そりゃ、そうだけどさ。ったく、そういうとこが意地悪なんだよ！あーもう、わかってるくせに」

すっかり怒ってしまった太一を見て、ジュンはいい加減おちょくるのをやめることにした。

「ごめん、ごめん、太一くん」
「ったくもー」
「でもま、参考にはなったでしょ？」

「まーな、嫌ってほど参考になったよ、くっそう」
「嫌なら最初っから自分で考えなよ、楽しようとするからそうなるのよ。いい薬でしょ」
「なんだよそれー」

ま、がんばれ、ってジュンは笑った。

太一編3

ぴんぽーん、とチャイムが鳴る。
「こんな時に誰よ、もう。大輔、出てー？」
「えっ、僕？お姉ちゃんは？」
「私は忙しいの！」
「僕もゲームいいとこ！」
「あーはいはい、お姉ちゃんのデータから好きなモンスター持ってっていいから、お願い」
「え、ほんと!?やった！」
せっかくの土曜日だというのにパソコンとテレビを占領され、朝からずっとスタンバイしている姉に追いやられている。買ったばかりのテレビゲームができないとソファに寝っ転がって携帯ゲームをしていた大輔はようやく立ち上がった。ゲーム機を持ったまま玄関に向かっていった大輔を見届けて、ジュンは首に引っかけていたヘッドフォンをつける。
今朝からジュンはずっとぴりぴりしていた。
ほんの一週間前にあった2月28日の電子機器の不具合のニュースのせいである。お台場霧事件、もしくは光が丘テロ事件の関係者、そして未だに犯人が捕まらない電波傷害事件を覚えている世間に味を占めたメディアにより、この手の事件はとりわけ大きく報じられる。
まだ一般人が気軽に情報を発信できない時代だからメディアといった一部を対応すればいいが、そのうちデジタルワールド側の隠匿工作にも限界が来る時代が絶対にやってくる。2月28日は閏年に伴う電子機器の不具合が原因であり、デジモンは関係ないとゲンナイさんから回答をもらえるまでは気が気ではなかったのだ。
あーよかった、で、気づいたら3月4日である。ジュン以外の子供達は緊張感から解放されてのんびりとしたものだ。ジュンだって未来予知に近い知識が無ければそうしたかった。現段階で警鐘を鳴らすのは不可能だ。だからせめて迅速に対応できるようにしたかった。

お台場霧事件以後、ジュンは選ばれし子供たちのネットワークの拡大に尽力してきた。光子郎やハーバード大学に通う小学生に話を持ちかけ、増え続ける選ばれし子供たちの情報交換や交流を兼ねた場が必要だと提案したのだ。それはお台場小学校にパソコン部を作る大義名分にもなり、ジュンがお台場中学校との連携を促進させるお膳立てにもなった。

デジモンを知っている子供達のコミュニティとお台場霧事件や光が丘テロ事件に類似した出来事を語るようなコミュニティを作った。光子郎はどっちも行き来しながら、ジュンと手分けしてゲンナイさんにデジモンの関わりが疑われる事件について情報を提供するよう関係は強化されている。

なにせ選ばれし子供達はもちろんデジモンたちも、去年の１２月３１日の深夜、その情報伝達の拙さにより酷い目にあったのだ。ゲンナイさんたちとの連絡手段が確立していなかったせいで、偽物のメールに誘き出された。しかもデビモンによる分断作戦を再現され、みんなばらばらに飛ばされ、異次元に幽閉されてしまった。

その上、再構成前のダークマスターズに蹂躙されたデジタルワールドで、歴代のボス達を一気に相手にしなければならないという無理ゲーを強いられた。新たな仲間である秋山遼がいなければ間違いなく詰んでいた。もし、アイドルコンサートに遠征にいっているジュンがゲンナイからのＳＯＳに気づかなければ、きっと幽閉されている世界がミラーワールドだなんて気づかないまま、遼は太一達を見つけることができなかったに違いない。この教訓から、ホウレンソウは大事だとみんな学んだのだった。

選ばれし子供達の掲示板で、ジュンは正体不明のデジモンに注意喚起するゲンナイさんからのメッセージを受け、直感したのだ。冷戦時代のアメリカで製造され、２００２年に遺棄される運命にある核兵器の１つが何者かにハッキングされ、お台場近隣に着弾するという大事件が起こったことを知っている。

歴史の授業で必ず習う出来事だし、デジタルモンスターについて調べると一度は目にする超弩級の有名デジモンだ。今でこそデジタル

ワールドに受け入れられる形で転生し、テイマーにも愛好家が多いこのデジモン。原始のデジタルモンスターそのものの生態をしているため、人間世界との共存を決めたデジタルワールドにとって最も忌避すべき存在であり、本来のデジタルモンスターを愛好、もしくは誇りに思っている者達からは神聖視されている。

たった４０分の奮闘はデジタルワールドの冒険で何度も読んだから知っている。ジュンが何もしなくても大丈夫だとはわかっているが、できることなら協力したいと思うのはテイマーの端くれだからだ。

３月４日はジュンにとってまさにXデーなのだ。この日ばかりは友達との予定は入れなかったし、なにもしないと決めていたからほかには見向きもしないつもりだった。なのにまさかの訪問客である。ジュンは集中力が切れてしまった。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、空さん」

「え、空ちゃん？」

「うん」

「あれ、なんか約束してたっけ？」

「お姉ちゃん、はやく！どっか出かけるのになんでそんなゆっくりしてるの？」

「えっ、ちょっとまって、え、嘘」

きょとんとしているジュンに、はやく、と大輔は急かす。サッカー部の上下関係は絶対だ。たとえ空がすでにサッカー部を辞めてお母さんから華道を習い始めていたとしても、かつて太一とツートップだった彼女は大輔にとって尊敬すべき先輩であり、絶対に逆らえない先輩である。

はやく！とよほど急かされたのだろう、大輔は騒がしい。さすがに空だとは思わなかったジュンである。一応、２月２８日の事件については子供達に通知はしてあるし、何かあったらすぐに連絡するとは伝えてあるけども。なにかあったんだろうか。立ち上がったジュンを後ろから押していく大輔はどこか楽しそうだ。

「おはようございます、ジュンさん。遅いから迎えに来ちゃいました」

そこには、明らかに何処かにお出かけにいく格好をした空が居た。
「あーうんおはよう、空ちゃん。ごめん、今日なんか約束してたっけ？明日じゃなかった？」
「今日もですよ、ジュンさん」

たしかに空と遊びに行く約束はしていた。高校受験を控え、志望校を事前に見に行くために靴を新しくしたいと言っていたら、お誕生日が近いという情報も相まって一緒に買い物にいくことになったのだ。3月4日はもちろんNG，だから5日にしたはずなのだが。
疑問符がとんでいるジュンに、空は教えてくれた。ゲンナイさんからデジモンは関係ないと教えてもらったとき、ミミはこれでハワイにいけると喜んだ。いいなー、と反応した空に、じゃあ二人でどっかでかけようかと提案したのがジュンだというのだ。そういえばずっと抱えていた緊張感から解放された矢先だったから、そんなこと口走っちゃったよーな、してないような。
「たしかにそう言われてみれば、そんな気が・・・・・・あっちゃー、ごめん。すっかり忘れてた。ちょっとまってね」
「お姉ちゃん出かけるの？」
「うん、出るわ」
「やった！」
「そーだ、大輔。ちょっといい？」
「なに？」
「もし太一くんか光子郎くんから電話がかかってきたら、私の電話に掛けるようにいってくれる？あるいは頭に
171ってつけてね」
「うん、わかった。でも171ってなに？」
「お台場霧事件みたいな事件が起こったら使える留守番電話のことよ」
「わかった！」
去年、大輔はなんだかわからないけれど、とっても怖い思いをした、というぼんやりとした記憶が残っている。ジュンの言いたいことは

すぐわかってくれた。
「わー、ごめんね！すぐに着替えるから待ってて！あ、あがる？」
「いいですよ、待ってます」
　空はなんとなく予想はついていたようで、気にする様子はない。一つのことに集中すると周りがみえなくなる男の子を空はよく知っている。ジュンが似たようなタイプだと知っていれば、こうもなる。それにどこか噂話をする女の子のような、妙に生き生きとした、楽しそうな雰囲気がある気がする。ジュンは不思議に思いながら自分の部屋に引き返した。
　ネット環境につなぐことができればいいのだ、最悪。なら、そういったところを選んで買い物なり遊び場を決めたりすればいい。必死で頭を回転させながら、ジュンはよそ行きに着替えて玄関に向かった。
「聞きましたよ、ジュンさん」
「え、なにが？」
「太一からキャンディもらったんですよね？あの太一から。ね、どうでした？」
「どうって、おいしかったけど」
「そっちじゃないですよ―」
　空はどこか楽しそうだ。それはもう芸能人の恋愛模様を好き勝手かき立てる雑誌のごとく、好奇心に満ちあふれた顔をしている。にこにこ笑っている空に、以前のバレンタインデーを思い出したジュンはしまったと血の気がひく。結局あのキャンディーの入った袋、間違えてない？って返そうとしたら、引っ込みがつかなくなってしまったのか、やけくそになった太一からあげると言われてそのまま逃げ帰られてしまったのだ。
　さすがにわざわざ届けに行くのも、もし光と会ったら太一が余計かわいそうなことになる。というわけで結局太一の間違えてしまったホワイトデーのお返しはジュンが美味しくいただいたのだ。賞味期限が当日だったから仕方ない。てっきり太一は太一で別のプレゼント用意したと思っていたのに、なんだこの会話。もしかして太一君、

クッキー渡しちゃったんだろうか。さすがに小学生である。込められた言葉に一番敏感な時期だ。
　空は太一がジュンに好意があり、キャンディを渡したと思ってしまっているのだ。この反応は脈なしといっていいだろう。応援する体勢にはいている。
「太一に聞いても教えてくれないんですよね。昨日怒って電話切られちゃって」
　そりゃ怒られるわよ、空ちゃん。片思い相手になんて話題ふっかけるの。知らないとはいえ、その事態を招いてしまったジュンは罪悪感が山積していく。いたたまれない。こんな空気の中連携とらないといけないとか普通にきつい。せめて、せめてフォローしなくては、とジュンは言葉を紡ぐ。
「私は相談に乗っただけよ、相談」
「え、相談ですか？」
「うん、そう。好きな子に誕生日プレゼントあげたいんだけど、なにがいいかなって。文房具とかいろいろ考えてはあげたけど、やっぱり一番は自分で考えた方がいいって教えてあげたわ。素直に伝えられないなら手紙にしたらってね」
　たんなる相談相手だとアピールするつもりで言ったのだが、空はくすくす笑い始めた。
「空ちゃん？」
「ジュンさんってほんとに大人の駆け引きって感じですね。だから太一、あんなこといってたんだ、ふふ」
　振り回されてる太一っておもしろくて、と残酷すぎる言葉が聞こえてしまい、うわー、とジュンは心の中で叫ぶ。どうしてそっち方面に受け止めてしまうのだろう、空ちゃんは！
「いや、だからね？私は相談にのっただけよ？」
「そうですよね。うん、ジュンさんは相談に、ふふっ」
　なにやらツボに入ってしまったらしい。涙すら浮かんできた空は、恋愛話にテンションがあがるミミのように意気揚々としている。とりあえずこちらが太一に気がないとアピールできただけいいとしよ

う。
「あ、ジュンさん。こんなときくらい、パソコンはなしですよ」
「えっ」

太一編４

「・・・・・だーもう、どうすりゃいいんだよ！」

太一は悩んでいた。それはもう悩んでいた。下手をしたらテスト勉強以上に頭を悩ませていた。ジュンから宿題を出されて、もうすぐ三週間だ。ジュンからの反応はどうとらえたらいいのか、太一は正直わからないでいる。

はぐらかされているのか、遠回しに脈なしだといわれているのか、ぐちゃぐちゃ考えるのは正直得意じゃない。ジュンが素直になれないなら手紙でも書けといったのだ、たしかに口に出すには気恥ずかしいけど、いざ文字に起こすのもまた結構な羞恥を伴う作業だと太一は初めて気づいた。

パソコンを前にして、あーとかうーとか言いながらうなっている太一の横から伸びてくる手がある。

「何書いてるの？メール？」

「うわあっ!?な、なんだよ、光って見るなよ！」

あわてて×ボタンを連打する。

「なんで隠すの？」

「なんでもねーよ！」

「？変なお兄ちゃん」

ピンクのワンピースを着ている光はどこかに遊びに行くようだ。

「どっか行くのか？」

「うん、今日みっちゃんの誕生日だから。これプレゼント」

「あー、あんとき買ってたやつ？」

「うん。お兄ちゃんはまだなの？」

「なにが？」

「ジュンさんの誕生日プレゼント。まだいーだろって買わなかったけど、もう買った？」

「うっせえ、こっちだっていろいろ考えてんだよ」

「ほんと？ホワイトデーの時みたいにマシュマロ買おうとしてない

？」
「だーから、あげるお菓子に意味があるとか、そんなの知るかよ！そこんとこは感謝してるけどさ！」
「ジュンさんなんて？」
「おいしかったってさ」
「え、それだけ？」
「そーだよ、わりーかよ」
「お兄ちゃん、なんて渡したの？」
「・・・・・・いーだろ、そんなの」
拗ねたようにふて腐れる太一を見て、光は笑う。これはいいことを聞いた。誕生日会でみっちゃんたちと王様ゲームするとき、きっと回ってくる内緒の話とかそういったのに使える。そう思った。よからぬことを考えている光に気づいたらしく、何笑ってんだよと太一はじと目だ。なんでもないと光は首を振った。ほんとかあ？と太一は訝しげだ。
大好きなお兄ちゃんがとられるのは正直、光は嫌だなと思うこともある。お兄ちゃんの一番じゃなくなるのは嫌だなって。でも、ずっと頼れるお兄ちゃんだった、光にとってはいつだって守ってくれるお兄ちゃんがどうしようもないとき、頼る人がいるという当たり前を光は去年学んだ。
お母さんと久しぶりに会えた時泣きじゃくっていた太一を見たときが最初で。次がデジタルワールドで熾烈を極めたダークマスターズとの戦いで。あとはもう、数え切れないくらいあった。その積み重ねが今の太一の初恋なのだとしたら、そっかあ、ってなるのだ。光の気持ちは別問題として、そういうこともあるんだなって。
小学校3年生になった光はちょっとだけ大人になった。ミミがそういったドラマとか、漫画とか大好きで、ジュンも友達の影響か結構詳しくて、そういうのを貸してもらえるようになったのもある。お兄ちゃん子だった光はその漫画を読んだりアニメをみたりすることはあっても、女の子向けのジャンルを見る機会は以外と無かった。

空はあんまりそういうの好きじゃないし。ミミの布教活動はそりゃもう熱心だった。女の子なんだからもっとかわいいを楽しまなきゃ、とシンプルな動きやすい服ばかりな光を買い物に連れ出した。インドア派なジュンは百恵が増えたって嘆いていたけれど、光の周りにはいろんなタイプのお姉さんが一気に増えてしまったのだ。

好きなものも、ジャンルも、なにもかも違うのに、デジモンという共通点で結ばれている、そんな不思議なお友達がたくさんできた。しかも空がサッカーをやめて、お母さんの手ほどきを受けて華道を習い始めた。講座発表会にお邪魔したら、綺麗な着物を着てお茶を点てていた。正直どきどきした。

みんな、変わっていく。なら、私もちょっと変わりたい。そう思った。だからピンク色のワンピースを着ているのだ。今までの光だったら、あんまりこういうのに興味は示さなかったから、お母さんはちょっとうれしそうだったりする。

うーんうーんうなっている太一の横を隙ありとばかりにのぞき込む。買ったばかりのお気に入りを翻し、光はパソコンの横に立つ。うわっと大げさに驚いている太一の横で、マウスを操作する。

「はい、送信」

「うわあっ!?ちょ、何してんだよ、光!」

「お兄ちゃん送るんでしょ?」

「そーだけどさー」

送信完了の文字に太一はどうしようとぐるぐるし始める。らしくないがたくさん見れて、これはこれで楽しかったりするのだ。光は。あのメールだって、みんなでお祝いすることになっているから、それとはまた別にどっか行こうと誘うメールだったのだ。

想いを伝える言葉はひとつもないのに、ここまで太一は悩んでいる。あの太一がだ。帰ってくる頃にはなんかあったらいいなと思う。光のちょっと違う普通じゃない体質について告白されたとき、大輔みたいねといいながらあっさり受け入れてくれたジュンである。

怖いと泣きじゃくるたびに何一つ否定されず、抱きしめてくれたお姉ちゃんがいる。同級生の男の子がとてもうらやましくなってしま

うくらいには、光はジュンに好感を抱いている。
「いってきまーす」
お兄ちゃんを置き去りにして、ちゃっかりとした妹は出かけてしまったのだった。

買い物を楽しんでいた空とジュンは、近くのフードコートで休憩していた。値札は適正な価格なのに、レジで表示された値段が百万単位という訳の分からない事故に巻き込まれた。どこをどう見ても故障ということで、手動でレジの人は対処してくれた。なにがあったのかな、と二人で話していたフードコートで、着信が鳴り響く。
電子音声のあと、太一の声が聞こえてくる。思わず立ち上がったジュンは音が漏れないように抱えたまま、空に手招きする。きょとんとしたまま近くに寄ってきた空に、ジュンは真剣なまなざしを向けた。
「光子郎君から電話だわ。こっちのネットに新種のデジモンが現れたんですって！」
「えっ!?それほんとですか？」
「ええ、連絡いれろって言ってる。ね、空ちゃん、デジヴァイス・・・・・」
「もちろん、ありますよ！」
空はうなずいた。２月２８日という、たった５日前にデジモンが原因の電子機器の故障ではないか、と疑われる事象があったばかりなのだ。みんな念のためデジヴァイスを持ち歩き、ゲンナイさんからお墨付きをもらったあとも念のためと持ち歩いていたらしい。
さすがね、と笑ったジュンは周囲を見渡す。ここは人が多すぎる。せめて人目のつかないところ、とざっと周囲を確認し、近くに公園があったので、二人はそっちに向かった。
ウォーキングなどにいそしむ近隣住民しかいないところである。お昼休みだからか、コンビニの袋を下げた社会人がご飯を食べている。なるべく木々が多いところを探し、ジュンはパソコンを広げた。

無線ルータに接続し、ゲンナイさんの隠れ家にアクセスを試みる。
「空ちゃん、太一君の家に電話掛けてくれる？最初に１７１つけて」
「１７１ですか？」
「ええ、１７１。今新種のデジモンのせいでＩＳＤＮがつながりにくくなってるみたい。お台場霧事件とか先の震災とか、あの地下の事件とか、電話がつながりにくくなったときに大活躍したシステムなのよ。留守電をお互いに登録しあえるの。私と一緒にいるって伝えて」
「はい、わかりました」
うなずいた空はサッカークラブにいたとき、何度だって掛けた電話を掛けるのだ。
『ほっほっほ、さっそく来てくれたようじゃのう。待っておったぞ、ジュン』
「大変なことになってるみたいですね。もしかして、２８日の？」
『あのときは発見できなかったんじゃがなあ』
「こっちの世界はすごい勢いでネットが普及してますから・・・・・・」
『すまんのう』
「いえ、気にしないでください。それよりゲンナイさんは大丈夫なんですか？まだ暗黒の球・・・・・・」
老人姿のゲンナイにジュンは心配そうな顔をする。ゲンナイが老人の姿なのはダークマスターズに埋め込まれた暗黒の球を除去する作業中だからだ。彼の本来の姿は青年である。ホメオスタシスの手足となるエージェント唯一の生き残りであるゲンナイは、そのデータを複製することで本来の仕事を始めて果たすことができるはずなのに、まだその段階ではないと言われているも同然だ。
ゲンナイのデータが正常になるまえに複製することはなんの意味もなさない。きっと新種デジモンの発見の遅れも、そのせいなのだ。ひょうひょうとした笑いを引っ込め、ゲンナイは肩をすくめた。そしてその白いひげをいじる。困らせてしまっただろうか。ま、たしかに本来なら太一達は知り得ない情報だったから仕方ない。
『ジュンには敵わないな。すまないが、全くもってその通りなんだ。あのデジモンは、デジタルモンスターの原種にとても近い性質をして

いてね』
「コンピュータウィルスってことですか」
『理解が早くて助かるよ。まさしくそうだ。自己複製機能に加えて、デジゲノムを変化させて環境に適応し、すさまじい速さでデータに感染していく。生まれた意味、あのデジモンの場合は、制作者の意図、それを存在理由にしている』
「クラッカーの意図なんて愉快犯しかないじゃないですか」
『ああ、困ったことにね。我々はどんなデジモンも許容するさ、世界を崩壊させかねない因子を持たない限りはね。ただ私たちは君たちと共存の道を選ぶために模索中なんだ。あのデジモンは現実世界にとっても、我々の未来にとってもよくない。せめてデジタルワールドに来てもらわなければ困るんだ。頼めるかい？』
「はい、わかりました」
『今、奴は太一と交戦中だ。相手のデータを取り込んでどんどん強くなってる。完全体相当だ』
「えっ、もう完全体ですか!?しかも学習しながらって、そんなの上から殴って速攻で決着つけないとやばいじゃないですか！」
『ああ、異常事態だ。頼むよ、ジュン』
「わかりました！」
　ジュンのパソコンに、結界から行動することができないゲンナイの代わりとなるネットワークセキュリティの権限が一時的に譲渡される。デジタルゲートを操作するプログラムが展開する。
「ジュンさん、太一と連絡取れました。今、遊園地の管理システムの中にいるって！」
「遊園地ぃ!?それほんと!?あーもう、死傷者出たらどうしてくれんのよ！空ちゃん、こっちがサポートするから光子郎君にもネットに行ってって伝えてくれる？デジタルゲート開くから！」
　去年の大晦日の大冒険で一度はとった連携だ。なにをしようとしているのか、空は分かったらしい。ジュンのパソコンの向こうで、空ー！と名前を呼んでくれるパートナーを確認した空はデジヴァイ

スを手にする。そしてＰＨＳに話し始める。
　選ばれし子供とパートナーデジモンはその性質上、離れてしまうと戦力が大きく削がれてしまう。しかしネットの中の戦いはナビゲートが必須だ。きっと太一やヤマト、タケルはすでにネットの中だが、光子郎は太一の部屋だろう。
「あ、ジュンさん」
「なに？」
「掲示板のサーバ？っていうのが重くなりすぎて、えーっと、レスポンス？っていうのが下がってるらしいです。任せたって」
「はああっ!?そんなの一時的に凍結すればいいじゃない」
「あのデジモンの同行、見てる子達から情報入ってるから切るに切れないらしくて」
「うっそでしょー、サポートとサーバの管理同時並行とか普通に死ねるわよ！あーもう、ゲンナイさあん！」
『このログは残しておいてくれないかい？』
「まっじですか!?わかったわよーっ！やってやろうじゃない。今更太一君達が私のパソコンから入るなんて非効率すぎるもんね、この野郎、ただじゃおかないわよ！」
　デジタルゲートを開きながら、ジュンは空が一番近くのネット回線に入り込むのを確認する。一時的に回線は重くなるが、世界の危機なのだ。我慢して欲しい。ゲンナイの回線から飛び込んできたピヨモンが、どうすればいいか聞いてくる。
「ここで一気に進化しちゃって！交戦中のところに成長期で飛び込むのはあぶないわ。一気に転送するから！」
『わかりました。いくわよ、ピヨモン！』
『うん！』
　光子郎の放置されているであろうパソコンにハッキングを仕掛け、一時的に権限を譲渡する作業を同時並行で行い、ジュンはその光景を別画面で見守る。大晦日のミレニアモンの奇襲により、ダークマスターズのいた時代に飛ばされ、丈と共に究極体を頂点とする完全体の軍隊相手に完全体２体で応戦を強いられた空とピヨモンは確実に成

長している。ジュンの目の前で、ピヨモンはバードラモン、ガルダモンをすっ飛ばし、さらなる姿に成長を遂げる。
　黄金色に輝く4枚の羽を持った聖なるデジモンが咆哮する。空が騎乗していることを確認し、ジュンは空を転送した。そしてジュンもその画面を見る。
　ホウオウモンの光来と共に周囲にまばゆい光が四散する。ウィルスの性質を一気に最適化する光により、妨害目的だろうか、周囲に漂っていた新型デジモンのクローン体は一気に消える。
『空！』
『空さん！』
『来てくれたんですね！』
『待ってたぞ』
『待たせてゴメンね、みんな！』
「ここからは私がサポートするわ！みんな、よろしく頼むわよ」
　返事が聞こえる。どこかほっとした様子の太一だが、さすがにそこに気づけるほどの状況にジュンはない。太一からすればメールがまさかの拒否、ショックだったが大輔に電話を掛けたらジュンは出かけたという。
　ＰＨＳに掛けたら空が出た。残念でした、と茶化されたときは電話機を叩きつけたくなったが堪えたのだ。昨日だって好奇心からいろいろ聞いてきたのだ、空は。ジュンがちゃんと来てくれた。今まで応戦してくれたみんなにねぎらいを投げる。
「頼むわよ、太一君。アイツはすさまじい速度で経験値を詰んでるわ。手に負えなくなる前に、お願い」
『へへっ、任せとけよ！』
　ゴーグルを付けなおした太一は、うれしそうにうなずいた。

「太一くん、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないだろ！今日はジュンさんの誕生日だろ！」
「え？ああ、そうだけど？」
「これ」
「もしかしてくれるの？ありがと」
「お、おう」
「でもいいのー？結構可愛いラッピングじゃない。他に渡すべき人がいるんじゃないの？」
「はあ？何言ってんだよ、ジュンさん」
「またまたー、この前からかわれたからって、隠さなくってもいいじゃない。空ちゃんに渡すんでしょ？」
「はあっ!?なんで空が出てくるんだよ！別に俺と空はそういうんじゃないし、俺は空のこと、そういうふうには思ってない！だいたい、空に誕生日は夏だっての！なんでまだまだ先の誕生日プレゼントを渡さなくっちゃいけないんだよ！」
「え？」
「え？」

一乗寺治編

「ジュンさん」
「え？どうしたのよ、治くん。改まって」
「お疲れ様」
「あー……　うん、まあね。高校に進学できないなんて事態にならなくて良かったわ」
　ジュンはどこか疲れたように笑った。
　この世界に帰ってきた感動を噛み締める暇など高校受験という現実を前にしたときないも同然だった。推薦入試期間はとうにすぎた。しかも私立の一般入試も願書の提出日が過ぎていた時点でジュンは最後の望みをかけて前期は公立の高校の一般入試に挑まなければならなかった。第一志望だった高専は帰還できた日がバレンタインデーだった時点で、どうあがいても滑り止めや第二、三志望に進路を定めなければならなかった。どうにもならなかったのである。この時点で私立や公立の後期入試まで視野に入れて頑張るはめになったジュンは合格発表頃にはもえつきてしまった。
　そういうわけでジュンは図らずも親友である百恵と同じ公立の高校に進学することになったのだった。
「まあ、工業大学に進学すればやりたいことはできるしね」
「編入しないのか？」
「編入ねえ……　しばらく進路のことは考えたくないから頭の片隅にでもおいとくわ。あはは」
　はあ。出てくるのはため息ばかりだ。治は同情せざるをえないのである。デジモンの存在が表沙汰にできない時点で、ジュンの行方不明の説明がつかないのだ。
　現実世界においてはまだ中学三年生の１５歳でしかないジュンは、受験によるストレスで５０日間ほど出奔したということになってしまった。授業自体は受験生の三学期のため殆ど自習だったため。成績優秀者だったジュンは登校を免除されていたのでことなきをえた。
　久しぶりに学校に登校するなり両親と共に担任と校長に謝り倒し

たジュンである。病院に担ぎ込まれて緊急入院していたことは知らされていた大人たちは、ジュンがすさまじいストレスをかかえていたのではないかと考えたらしく、逆にまだ諦めるなと気を遣われてしまった。特にパソコン部の顧問は期待をかけすぎてしまった自分の責任ではないかと謝罪されてしまい、ジュンは困ってしまった。

下手に説明したらややこしいことになるため、ジュンはストレスに負けて出奔したことになってしまった。これは一生付きまとう事実となる。いずれデジモンの存在が明かされたらジュンの事情を話せる時がくるが、今はもうどうしようもない。パソコン部の仲間やクラスメイトに気を遣われてしまったり。色々言われたり。不慣れな注目を浴びてしまっているジュンはすっかり気疲れしているようだった。

「噂は75日っていうし、我慢するしかないさ」

「まー、そうなんだけどね……。治くんも大概じゃないの」

「ジュンさんと違って行方不明じゃなかったからな、致命傷にはならなかったよ」

バレンタインデーになるまで暗黒の球体を体に持ったままだった治は、時限爆弾をかかえたまま推薦入試に挑んでいた。

「すごい度胸だわ……」

「クロックモンさえいてくれたら、あとはデジヴァイスの結界でなんとかなったしな」

「デジタル時計っていいはって?」

「そうさ。ディーターミナルはさすがにパソコンと見なされてダメだったから、クロックモンには受験会場のネットワークから待機してもらってた」

「よく結界がバレなかったわね」

「規模の操作ができるようゲンナイさんがプログラムを追加してくれたんだ」

「それでもよ」

「試験が始まればこっちのものだったさ。集中すればジュンさんたちのこと考えなくて済んでたからね」

「あはは……」
「お互い進学出来て良かったな」
「ほんとにね」
　うんうん、ジュンはうなずいた。
「問題は行方不明事件なのよねー……　あー……　そのー、遼くんどんな感じ？」
　治は静かに笑った。
「あっ……　やっぱそっちでも噂になってんのね……」
「そりゃそうさ。同時期に行方不明者になった2人は友達だった。帰って来た日も同じ、しかもバレンタインデーだぞ。僕だって疑うよ」
「そうよねー……、学校も違うのに普通に仲良くしてたもんね、アタシたち。目撃者はたくさんいるかァ……」
「遼が僕とジュンさんのことをあることないこと学校で騒ぎたててたから自業自得なとこあるけどな」
「えっ、なにそれ、初耳なんですけど」
「おかげで僕がエスカレーターを蹴って外部受験したことまで余計な勘ぐりされて同情されまくってるよ。遼は持ち上がりだから居た堪れないだろうな」
「うわあ……　大惨事じゃないの」
「僕達を置いていった罰だ。これくらいで済んで感謝してもらいたいくらいだな」
「ほんとその件に関しましてはご迷惑をおかけしました」
「いや、ジュンさんはいいんだよ。悪いのはデーモンなんだから」
「まあ、そうなんですけど……　だってすっごいいい笑顔なんだもの。治くん。怖いわよ」
　治は目を細めて笑った。
「僕がジュンさんと同じ進路を辿ったら大騒ぎになりそうだな」
「いよいよ三角関係に終止符が!?って感じで周りがわくわくしちゃうパターンじゃないの。百恵あたりが知ったらえらいことになるわね」
「工業大学行くんだろ、ジュンさん？」

「そうよ。まあ、治くんも似たような進路よね」
「もちろん」
「あはは・・・・・ アタシでもできる未来予知がうかんだわ。たぶん的中率１００パーセントの」
　ジュンはうんざりとした様子で肩を竦めた。
「仕方ないさ。たっぷりとした情報の水源も、野次馬のところまで下りてくるころには、ぽつんぽつんという滴りみたいなものになってるんだから。好き勝手に想像するしかないんだ」
「まーそうなんだけどね」
　ジュンは躊躇いがちに治をみた。
「怒ってるわよね、治くん」
「遼には怒ってるさ」
「アタシにも思うところはあるんでしょ？いつもの治くんだったら、そんな噂話かき消してくれるのに放置してるんだし」
「まあ、否定はしないよ」
「うん、そうよね」
「聞いといて凹むのか、ジュンさん」
「凹まなきゃいけない時期なのよ、やっとこさ受験から解放されたんだから」
「それもそうか」
「悲しみも怒りも洗いざらい吐き出した方がいいのは経験上わかってはいるんだけどどうにもね、時間が経ちすぎちゃって。時間薬の効果が高すぎるわ」
　ジュンは浮かない顔だ。
「タイチたちのいたデジタルワールドは時間の流れが違ったからな」
「まさか５０日しかたってないとは思わなかったのよ。あっちじゃ４年たってたんだもの」
「ジュンさん的にはもう１８歳のつもりが１４歳のままだしな。無理もないか」
「まあね」
「まあ、話したくなったら話せばいいさ。誰もまだジュンさんを探す

ために渡ったいくつもの平行世界について話すつもりはないみたいだし、お互いさまだ」
「うん、そういってくれると嬉しい。気が楽になったわ。ありがとう」
「ただ」
「ただ？」
「サマーメモリーズで本当はなにがあったのか、大輔くんにだけは話した方がいいと思う」
「……　やっぱり？」
「ああ。大輔くんはパラレルモンに掴まったとき、どうやらサマーメモリーズでジュンさんがデジタルワールドに連れ去られたあとなにがあったのか見たようだからな」
「……　嘘でしょ」
「嘘じゃないさ」
「でも大輔はそんなこと一言も」
「言わないだけで待ってるんだよ。選ばれる前からそうだっただろ。いつも肝心なことは教えてくれないと愚痴りながらも待ってるじゃないか、君の弟は」
「……」
　死刑囚が心の内の泥のような言葉を吐く寸前の顔をしているジュンに治はしばしの沈黙を選んだ。
「まだ」
「まだ言えない？」
「まだダメよ、早すぎるわ。大輔まだ９歳なのに」
「あんな大冒険を僕らと成し遂げたのに？」
「それでもよ」
　治は息を吐いた。
「忘れてるのかもしれないが、大輔くんも僕らと一緒に平行世界を渡り歩いたんだぞ、ジュンさん」
「……　あっ」
「そう、そうさ。大輔くんは気づいてるはずだ。見たんだから。その目で。たくさんの平行世界の中で君が今の君であるのは僕らの世界

だけなんだと」
　ジュンは血の気がひいた。
「みんなは平行世界だから、ですんでる。でも大輔くんはサマーメモリーズでジュンさんがデジタルワールドに誘拐されたことが原因だと気づいてる」
　そして唾を飲み込んだ。
「どの世界でもパートナーデジモンや出会った時期は同じだったのに、僕らの世界のジュンさんだけが違うんだ」
　どの世界でも大輔の６つ年上の姉たる本宮ジュンは、ヴァンデモンのお台場襲撃の際、ヴァンデモンに捕らわれた子供の一人だった。いつもパンク系のファッションをしており、テンションの高い性格。行く先々で大輔の悪口を言っているが、険悪な関係ではない。
　ヤマトに片思いしていたが空と付き合っていることを知り失恋。２００２年１２月２６日以降はシュウに惚れる。しかし、ヤマトのファンであることは止めていなかったようで、その後も彼女の携帯電話にはヤマトのストラップがついている。２００３年の春にパートナーデジモンが現れている。
　それはデジタルワールドの冒険に示された本宮ジュンであり、小学校４年生までの本宮ジュンそのものである。
「話さない方が大輔くんを傷つけてるよ、ジュンさん」
　ジュンは小さく首を降った。
「大輔ったらなんでよりによって治くんに話すのよ……」
「僕がいった方がジュンさんが話してくれると思ったみたいだ。それに僕は口が堅いからな」
「まあ、治くんの追及から逃れられる気がしないから当たってるけどね、あーもう」
　諦めたようにジュンは笑った。
「どうせ聞いてるんでしょ、大輔」
「もちろん」
　治はしれっとポケットから携帯電話を取りだした。受け取ったジュンは耳を押し当てる。

「今どこよ、大輔。出てきなさい、全部教えてあげるから」
　しばらくして、今にも泣きそうな顔をしている大輔が茂みの向こうから出てきたのだった。ベンチに座ったジュンは大輔を隣に座らせる。
「じゃあ僕はそろそろ……」
「治さん……」
「ええ、待ってよ大輔。本気？」
「姉ちゃん、絶対どっかで嘘つくからやだ」
「だからごめんて」
「わかった」
「まじすか……　うわあ」
「この場に及んで目が泳いでるからな、往生際が悪い。観念させるために僕からいこうか」
「お願いしまーす」
「軽っ……　大輔軽いわね、あんた!?いつからそんなに仲良くなったのよ」
「５０日もあれば仲良くなるさ」
「ぐっ……　それ言われるとなにもいい返せない……」
　治はすぐ横のベンチに座った。
「僕たちはいろんな平行世界を回ったのは話したよな」
「ええ、そうね」
「結論からいうと僕が２００１年を迎えられたのはこの世界だけだった」
「えっ……　なによそれ」
「事実だから仕方ないだろ。あと、ミレニアモンが生まれた世界は賢が一人っ子だとわかった。あとはすべてミレニアモンが介入した世界だった。共通点としては賢がミレニアモンから太一くんや遼をかばって暗黒の球体を埋め込まれてゲンナイさんと連絡がとれない間にミレニアモンから干渉をうけてミレニアモンを生成しようとして大輔くんたちに止められていた。引き金は色々あるが遼の失踪と僕の事故死が同じ時期だったこと。葬式に来た父さんの同僚である及

川さんがヴァンデモンに精神を乗っ取られていたことからはじまってる」
　治はジュンをみた。
「ジュンさんが可能性の芽をぜんぶ潰してくれたから、僕は今ここにいるんだと確信してる。ミレニアモンはオリジナル世界の自分の意思でミレニアモンを作って時空を超えて遼を助けようとした賢をふたたび作り出そうとしていたんだ。ジュンさんがいなかったら、僕達は太一君たちと繋がれなかった。きっとベンジャミンさんを通して誘導してたミレニアモンの罠にはまっていたはずだった。ベンジャミンさんの不審な行動に気づいてくれたジュンさんのおかげだよ」
　ありがとう、の言葉にジュンは困った顔をしている。
「偶然だと思うんだけど……」
「ベンジャミンさんに不審感を抱いていたのはジュンさんじゃないか。
　交通事故が偶然じゃない気がするから気をつけろといったのは君だよ」
「そりゃそうだけど……」
「姉ちゃん、そんなことといってたのかよ!」
「そうだよ。ジュンさんがゲンナイさんと一緒にいるよう僕と賢に取り計らったり、交流を頻繁にしてたりしたのは心配だったからさ。君が心配してるようなことじゃない」
「えっ……　ちょっと大輔?」
「だって……」
「それはあとにしよう、大輔くん。あらためて聞きたいんだけど、ジュンさん。君のサポートはいつも的確だよな?それは君だけの技術なのか?君の精神がなんからの変化をしてないか?そうじゃないと平行世界の本宮ジュンと全く違う形でパートナーデジモンが現れるわけがないし、はるか未来からわざわざガーゴモンが会いに来るわけがないと思うんだ」
　理詰めで大手をさされたジュンは白旗をあげるしかなかった。
「降参よ、降参。わかったわ、話してあげる。アタシの正体について」

「姉ちゃん……」
「まずは謝らなきゃいけないわね、大輔。この世界の本宮ジュンは1999年3月4日のサマーメモリーズの事件で精神的なショックをうけて死にかけたのよ」
「!!」
「デジタルワールドはなんとか植物状態に陥った本宮ジュンを助けようとして、ネットワーク上にある本宮ジュンというパーソナルデータをかき集めて精神データを修復しようとしたの。そこでトラブルが発生したわ」
「もしかして、未来からミレニアモンたちが攻めてきた?」
「やだ、そこまで見たの?」
「ベムモンたちがゲンナイさんたちの前のエージェントたちを……」
「あー、なるほど。そこを見ちゃったのか……。そうよ、混乱に乗じて精神データに異物が混入したのに気づかないまま、デジタルワールドは本宮ジュンを現実世界に戻してゲートを閉じたのよ。ベムモンたちは四聖獣たちに倒されたけど」
「異物って?」
「それがアタシよ。20×　×　年を生きてた、アタシ」
　治と大輔は目を見合わせた。
「君は一体?」
「未来のオレがもう姉ちゃんは亡くなってるって……」
「あー、そっか。ミレニアモンは未来から侵攻してきたんだっけ?なら当然未来世界にもいったのね、大輔……　そりゃそうよ。本宮ジュンとアタシは同じ時間軸にはいられないわ。魂が同じなんだから」
　その言葉に治と大輔はいよいよ沈黙してしまう。
「アタシはね、デジタルワールドのセキュリティシステムの下請けプログラマーをしていたの。そしてベムモンのデジタマがデジ研を驕るミレニアモンによってばらまかれて引き起こされたデジタルクライシスの被害者になるはずが、どうやらアポカリモンの本体に目をつ

けられたみたいでね」
「やっぱり……」
「やっぱりってことは、聞いてるのね未来の大輔に」
２人はうなずいた。
「あっちだと２０２７年に暗黒勢力との戦いに終止符が打たれたんだ。そのとき、犠牲も少なからずあった」
「そのひとりが本宮ジュンだったわけね」
「そのとき、暗黒勢力の力をもろに受けたらしい」
「そうなの」
「未来の僕をかばって……」
「あちゃー……　アタシとやってること同じじゃないの」
　大輔はいよいよジュンにしがみついて離れなくなってしまう。
「あーもう、泣かないでよ大輔。もう全部終わったんだから。ね？」
「無茶いうなよ、ジュンさん。大輔くんからしたら、１９９５年に本来のジュンさんは大輔くんを庇って死んだんだぞ。しかも君もやることは基本変わらないんだから。甘んじて受けるべきだ」
「いつにもまして辛辣じゃないの、治くん」
「僕だけじゃないんだ。受験が終わった今、みんな我慢してたんだからな。覚悟した方がいい」
「……　あはは」
　ジュンはため息をつくしかない。
「というわけで、噂を沈静化するつもりは無いからな。遼がどう思ってるのかは知らないが、僕にとっては事実だから」
「……　えっ、ちょっと待ってよ治くん。どさくさに紛れてなにいってるの」
　治は意味深に笑った。